

地域貢献委員会：看護研究サポートプロジェクト

名古屋市立大学看護学部 地域貢献委員会

香月富士日・井出 由美・平岡 翠・渡辺 美奈・淵田英津子・澤田 敏子・
山手 美和・勝又 正直・堀田 法子

1. 看護研究サポートプロジェクトの取り組みについて

名古屋市立大学看護学部地域貢献委員会では、地域貢献の一環として、看護学部教員による看護研究サポートプロジェクトを行っている。対象は、名古屋市立大学病院を含む地域の病院や訪問看護ステーションなどに所属している看護職者であり、現在は地域貢献委員会の別の企画である「なごや看護生涯学習セミナー」の中の「看護研究いろはの『い』」を受講した者の中から、希望者を募って行っているものである。そのため募集は、前年度の「看護研究いろはの『い』」の受講者を対象に行っている。

(1) サポート状況

平成20年度から23年度までの研究テーマとサポート担当教員を文末に記載した。サポート教員は、希望者を募集しているため、教員の専門分野との関連領域のテーマを担当することが多いが、研究テーマが広範囲に渡るため、必ずしも教員の専門性が活かされていないことがある。しかし、研究の基本的なところをサポートすることで、看護職の方々も前向きに研究を進めることができるようなので、教員の専門分野に過度にこだわる必要もないのではないかと考えられる。

(2) サポート内容

サポート内容に関しては、研究テーマの絞り方、文献検索の方法、データ収集方法と分析方法、結果の解釈、発表用資料（抄録、パワーポイント）の作成方法など、研究のプロセス全般にわたって指導が行われ、研究成果の発表に至ることができた研究チームもあった。一方で、サポート教員への連絡が積極的でなく、十分に指導を受けられていないチームも見受けられた。研究サポートを希望したものの、臨床では日常の業務に追われ、研究に十分な時間が割きにくい状況が推察された。

(3) 今までの課題と改善した点

今までの課題としては2点挙げられる。1点目は、対象者のレディネスに関してである。初期には、ほとんど

のサポート教員は、研究チームの研究に関する知識が少なく感じていた。「看護研究いろはの『い』」の受講が役立つと考えるが、研究チームのほとんどがこれを受講しておらず、研究遂行全般にわたって時間がかかったようである。そのような課題を受けて、「看護研究サポートプロジェクト」は、前年度の「なごや看護生涯学習セミナー 看護研究いろはの『い』」の受講生に対する続編として企画され、基礎的な知識を得た上での実践編として、研究グループへの研究支援を目的とすることにした。

2点目は、研究サポートのルールに関してである。対象者へのサポート回数については、多いところで7～9回ほどの支援をおこなっていた。研究チームの方からは、手厚いサポートで研究方法がわかりやすく安心して研究を進めることができたというよい評価をいただいたが、サポート教員からはサポートプロジェクトの目標がはっきりしていないため、どこまでを支援してよいかわかりにくかったという意見があがっていた。指導を希望されたら際限なく対応している状況は、教員にとって負担となっていた。そのため、地域貢献委員会では、サポート教員と研究チーム双方とも気持ちよく取り組めることを目的として、ルール作りを行った。指導の回数の目安を3回程度とし、サポートを開始した。研究テーマやサポート教員により進め方は異なるが、面談は所定の回数程度となり、その他メールやファックス、文書交換等の媒体を用いて支援を行った。このようにルールを明確にしたことで、より研究チームも遠慮せず相談しやすくなるし、教員側の負担も軽減し、良い形に発展していったものと考えられる。

2. サポートを受けた側からの評価：

名古屋市立大学病院看護部からの評価

名古屋市立大学病院看護部では、昭和40年頃より院内の看護研究活動の記録が残っている。昭和44年からは毎年、ほぼ全部署で看護研究に取り組んできたが、看護研究過程についての理解は不十分で、テーマの選定・研究デザイン・統計分析・研究倫理などについて支援が必要な状況であった。平成19年度以降、看護学部地域貢献委

員会看護研究サポートを受けるようになり、平成22年度までに病院全部署が一通り看護学部教員のサポートを受けて看護研究に取り組んだ。サポート希望者は、前年に必ず当委員会主催の「看護生涯学習セミナー：看護研究いろはの『い』」を受講し、基礎的学習を進めて研究へ取り組むこととした。

なぜ看護研究に取り組むのかという動機については、自発的というよりは、院内看護研究会で発表するという目標に向けての、看護部の現任教育の一環という位置づけが強かった。サポート開始前は、自信がない不安や苦手意識とともに「やらされ感」が強かったが、看護学部教員から丁寧な指導を受けることで、看護研究を通して自分達のケアについて深く考え、「看護」について追及する面白さや、研究をまとめ発表する達成感を学んだと考えている。

プロジェクト実績報告書を振り返ると、研究テーマの絞り方から、研究計画書、文献検索方法、データ収集方法と分析方法、結果解釈から発表用の抄録やパワーポイント資料など、研究過程において多岐に渡ったサポートを受けている。学内という安心感から、何度も相談していた部署も見受けられ、サポート教員の負担が懸念されたため、平成22年度には相談回数を3回と提示した。しかし、3回では不足であるという意見が多く聞かれており、今後、直接面談の他にも電子メールなどの情報ツール活用など、負担が軽く効果的な方法を検討したい。また、勤務後の時間に相談するなど、受講者の勤務体制に配慮してご指導いただいた部署もあり、感謝とともに、進行状態の把握や指導を受けやすい勤務調整など部署全体の支援体制を整えていきたいと考えている。

サポート期間としては、2年がかりでじっくり取り組む部署もあり、院内発表だけでなく学会発表できる内容にまでご指導いただいている。臨床で看護職が看護研究を行うことは、臨床というフィールドで現場に活用できる研究テーマがたくさんあるうえに、患者や家族との関係性も築かれており、多くのデータを収集しやすいというメリットがある。看護実践の現場で科学的に看護を追及していく視点を養い、その結果を還元していくことが看護の質の向上につながり、よりよい看護実践ができると考える。

今後も看護の質向上に向けて、支援を受けたスタッフが発信して部署の看護研究の取り組みの充実に繋がることを期待する。そして、学び得たものを私達の力で後輩に伝えていくことも課題であり、大学看護学部と大学病院臨床という川澄キャンパス内の連携をさらに強めて、このプロジェクトが継続されることを期待している。

3. 看護研究サポートプロジェクトの今後の課題

今後の課題として3点ほど考えられる。1つ目は、名古屋市立大学病院以外の看護職者への研究サポートである。名古屋市立大学病院とは、連携も強化され、連絡も密にとれることから、システムも安定してきたものと思われるが、地域貢献というからには、特定の病院だけでなく幅広く地域で働く看護職者のサポートをするべきである。その点では、研究サポートの取り組みは十分とは言えない。2つ目は、研究の学会発表や論文発表などである。優れた研究は、大いに学会発表などで公表するべきであると考えられるが、そのための前提としては、倫理的に十分に配慮されていることがあげられる。研究倫理審査委員会等は、各病院看護部とも十分整備されておらず、研究の公表は今後の課題であると考えられる。最後に、教員の負担についても配慮する必要がある。看護学部教員は、定数削減や産休のため欠員である中、大学院を含め教育の負担は増加している。そのような中で、地域貢献の責任を果たしていくには、サポートシステムの整備等を重ね、最小限の負担で行えるように工夫することが大切であると考えられる。

<平成20年度 研究テーマと担当教員>

	サポート施設	研究テーマ	サポート教員
1	名鉄病院	至適体重にチャートに基づいた体重コントロール指導と産後の体重回復との関係	寺口
2	中部労災病院	一般病棟で緩和ケアに携わる看護師の意欲を支える要因	大川
3	名城病院	心不全の患者に対する退院指導	明石
4	名古屋市立大学病院 救急病棟	救急処置室(E R)でのシミュレーション実施による学習の有効性	明石
5	名古屋市立大学病院 中央手術部	術前訪問に対する病棟看護師と手術室看護師の意識（または認識）調査/評価の比較	足立
6	名古屋市立大学病院 I C U・C C U	I C U入室患者家族のニーズに見合ったケア参加を考えるーI C Uのしおりを作成してー	村川
7	名古屋市立大学病院 8階北病棟	妊婦の外来保健指導に対するニーズ調査ー当院助産師相談室においてー	中嶋
8	名古屋市立大学病院 11階北病棟	酢を利用して胃カテーテルのつまりの原因をなくす	明石
9	名古屋市立大学病院 13階南病棟	がん性疼痛のある患者に対する疼痛マネジメントの取り組み	樺野
10	名古屋市立大学病院 14階南病棟	混合病棟で働く看護師のプレパレーションに対する意識改善への取り組み	山口
11	名古屋市立大学病院 17階病棟	効果的な口腔ケアを考える	肥後
12	名古屋市立大学病院 看護部事務室	院内研修の効果	香月

<平成21年度 研究テーマと担当教員>

	サポート施設	研究テーマ	サポート教員
1	宇野病院	看護・介護を共有した業務体制のあり方について	原沢
2	東部医療センター名古屋 東市民病院	外傷による骨折患者、家族の不安	明石
3	名古屋市立大学病院 12階北病棟	看護師が出す夜間の音に対する調査	堀田
4	名古屋市立大学病院 12階南病棟	スタンダードプリコーションを通して感染予防対策への取り組み	小椋
5	名古屋市立大学病院 10階南病棟	看護師の病棟におけるストレスの種類と度合の比較	寺口
6	名古屋市立大学病院 11階南病棟	フィッシュ哲学の導入による看護師のストレス変化について	香月
7	名古屋市立大学病院 16階北病棟	肝疾患患者への栄養指導	大川
8	名古屋市立大学病院 16階南病棟	術後せん妄予防・術後せん妄患者のための看護評価	畠田
9	名古屋市立大学病院 NICU・GCU	NICU退院後の家族（母親）の不安について調べ、退院指導に活かす	山口

<平成22年度 研究テーマと担当教員>

	サポート施設		サポート教員
1	宇野病院	患者に安全な看護ケアを提供する看護職・介護職の協働における課題-医療型療養病棟における調査から-	原沢
2	名古屋市立東部医療センター東市民病院	外傷による骨折患者、家族の不安	明石
3	名古屋市立大学病院 16階南病棟		畠田
4	名古屋市立大学病院 NICU・GCU	NICU退院後の母親の不安に関する実態調査-不安の内容と不安が増強する時期に焦点を当てた面接法による調査-	山口
5	愛知県心身障害者コロニー 中央病院	自宅介助が困難なブラダグウィリー症候群患者の退院への取り組み-心理的アプローチを試みて-	西野
6	ますこ訪問看護ステーション	訪問看護師のストレス調査	田中
7	名古屋市立大学病院 8階南病棟	終末期にある患者を持つ家族の思いの明確化～希望に沿った看取りの支援に向けて～	香月
8	名古屋市立大学病院 17階南病棟	デスカンファレンスの試みから明らかになった看護師自身が気づきを得るプロセス	原沢
9	名古屋市立大学病院 9階南病棟	ターミナル期における両親へのサポート-看護師の役割認識と実践の現状-	堀田
10	名古屋市立大学病院 9階北病棟	検査・処置後の患児の気持ちを切り替えるきっかけづくり-検査・処置カードを使用した時の患児の反応-	大塚
11	名古屋市立大学病院 12階北病棟	固定チームナースング転換期における看護師の意識の変化	守田
12	名古屋市立大学病院 12階南病棟	入院埋伏智歯術のクリニカルパス導入後の現状と課題	寺口

<平成23年度 研究テーマと担当教員>

	サポート施設	研究テーマ	サポート教員
1	北医療生協北病院	医療事故と看護師の経験（仮）	杉村
2	北医療生活協同組合	リビングウィルについて（地域の啓蒙活動による変化）	肥後
3	中日病院	新患外来患者の診療における看護師の問診について（仮）	池田
4	名古屋市立大学病院 7階北病棟	看護師のカウンセリング技術向上に向けての取り組み（認知行動療法や認知行動療法で用いるコミュニケーション技術の活用）	香月 *23・24年度
5	名古屋市立大学病院 13階北病棟	患者の身体の下に敷いていたバスタオルについて（使用していない現在との比較）or臥床患者の睡眠・昼夜逆転について	金子
6	名古屋市立大学病院 11階北病棟	頸部放射線治療を受ける患者の口腔粘膜障害に対するケア介入	山手
7	名古屋市立大学病院 12階南病棟	ウォーキングカンファレンス	脇本
8	名古屋市立大学病院 中央手術室	当院における医師と看護師のタイムアウトに対する意識についての比較検討	畠田
9	名古屋市立大学病院 8階南病棟	終末期にある患者を持つ家族の思いの明確化～希望に沿った看取りの支援に向けて～	香月 *22・23年度